

カメレオン

戸田中央看護専門学校 土持 葵

学校の授業で血液透析について学んだ。その時にはずっと続けていかなければならず、大変なものだなとしか思わなかったし自分とは縁遠いものと思っていた。看護学校に入るまで病気や疾患を持った方と関わる機会も少なく、ある意味で特別なもののように感じていた。

ある日スーパーに行くとき前腕に2箇所絆創膏をつけている女性が目に入った。「注射をしたのかな、でも前腕に2箇所もやるっけ」などと考えていた。しかし、絆創膏の近くをよく見てみると腕が線状に盛り上がり、血液透析のシャントが入っているということに気がついた。その女性はなんでもないかのように野菜を選び、隣にいた旦那さんと何気ない会話をしていた。そのときに私は、疾患のある方が自分の近くにいないのではなく、疾患のある方が近くにいることに自分が気づいていなかったただだとハッとしました。

どうしても女性のことが気になって家に帰ってから血液透析について振り返った。4時間の透析を週に2、3回。それに加えて、体重管理、水分制限、塩分制限など多くの制約がある中で生活しているとわかった。また、透析の時に使用する針は15～18Gととても太く侵襲が大きい治療であること、それを一生行っていかなければならないことがわかった。私が学校で授業を受けているとき、あの女性は腕に針を刺して痛い思いをしながら何時間も透析をしているかもしれない。私が好きなものを食べているとき、塩分や水分のことを考えて食事をしているかもしれない。その女性と出会ったことで、自分が見えていないだけでどこかで病気と闘いながら過ごしている人がいること、自分が看護をするときに病院にいる時の患者さんの姿しか見れていなかったということに気がついた。その後の生活では、周りの人をよく見るようになった。電車を待ってる男性がリュックサックにつけていた「耳がきこえにくいです」というキーホルダー、ぱっちり化粧をした綺麗な女性がつけていたヘルプマークなどがよく目に入るようになった。周りを見ながら生活してみると気にしていなかっただけで周りには疾患や障害を抱えながらもカメレオンのように健康な人に溶け込みながら生活をしている方が沢山いるということがわかった。

みんななんでもないように生活をしているけれど、私たちから見えないどこかで治療や痛みを耐えているのかもしれない。病院で見える姿だけを捉えるのではなく、患者さんの生活や人生、思いに目を向けて、日々の隠れた頑張りや努力に気づき、労いの言葉をかけたり思いを傾聴するなど少しでも辛い気持ちを軽くして、一緒に頑張りたいと思ってもらえるように寄り添う看護をしていきたいと改めて思った。